

REPORT I

アートと市民・子どもをつなぐ「アウトリーチ活動」 - 芸術による社会サービスの可能性 -

社会研究部門 吉本 光宏

兵庫県の温泉町、雪まだ深い12月のある日、温泉小学校にバイオリニストの高木和弘さんがやってきた。木造校舎の音楽教室に集まった児童たちの目は興味津々だ。ホンモノのバイオリンを見るのはもちろん、目の前でプロのバイオリニストの演奏やお話を聞ける体験など、生まれて初めてのことだろう。ときおり、京都弁で興味深い話を織り交ぜながら、高木さんは、美しいメロディを奏で、子どもたちが目を見張るような指使いを披露していく。

隣町の和田山町の協力で、音楽教室には、子どもオーケストラ用のバイオリンも持ち込まれた。「そっと壊れないように触るだけだぞ」という先生の注意に、最初はおそるおそるバイオリンに触れていた子どもたちも、高木さんから、「こんなふうに弓を弦に当てて動かしてごらん」と声をかけられ、腕白そうな男児がギューッと音を出すと、教室の中は子どもたちの歓声で一杯になった。高木さんのバイオリンと子どもたちのリコーダーの合奏なども行われ、最後に感謝の花束が贈られて、45分の特別授業は終了した。

1. 「アウトリーチ活動」の取り組み

これは、(財)地域創造が地域の公共ホールと

タイアップして実施している「公共ホール音楽活性化事業」の一コマである。この事業は、有能な若手演奏家を地域に派遣し、地元のホールで演奏会をおこなうとともに、アクティビティと称する地域活動を組み合わせて企画・実施するもので、(財)地域創造から助成金が支給されるしくみになっている。

ここで紹介したのは、温泉町の夢ホールが実施した地元小学校でのアクティビティである。バイオリニストの高木さんは、演奏会に先立ち、12月に地元小学校2校と中学校1校、老人ホームを訪問。3月にはピアニストの高橋多佳子さんとのデュオリサイタルが夢ホールで開催された。会場には、普段はホールやクラシックにはほとんど無縁と思われる地元のお父さんやお母さんが、子どもたちに手を引かれて訪れ、演奏会も成功裏に終了した。

劇場やホール、あるいはアーティストや芸術団体が、通常の演奏会や公演とは異なる形で、芸術を市民や地域に届けようという取り組みは、最近、アウトリーチ活動と呼ばれ、芸術を社会に開いていく試みとして、注目を集めている。

アウトリーチ(Outreach)とは、もともと「手を伸ばすこと、手を伸ばした距離、(地域社会への)奉仕・福祉活動、(公的機関や

奉仕団体の)現場出張サービス」という意味。このことから転じて、文化施設や芸術団体では、日頃、芸術や文化に触れる機会の少ない市民や地域に対して働きかけ、芸術を提供していくことを、広くアウトリーチ活動^(注1)と呼んでいる。

劇場や美術館などの文化施設、あるいはオーケストラ等の芸術団体において、アウトリーチ活動に関心が向けられるようになったのには、いくつかの背景がある。まず、新しい観客や聴衆へ積極的にアプローチをすることによって、観客の増加や将来の観客育成を図ろうというねらいである。美術展や演奏会、演劇やダンスなどを鑑賞するのは、もともと芸術に関心のある人々に限られている。そこで、日頃、芸術や文化に触れる機会の少ない市民や地域に対して、文化施設や芸術団体の側から働きかけ、鑑賞者の裾野を広げていこうというのが、その目的である。とくに、子どもたちを対象にしたケースでは、10年、20年後の観客育成が念頭に置かれている。

次にあげられるのは、公的な文化施設などが、サービスの間口を広げようという取り組みである。観客の増加を図ることだけを目的とするのではなく、公的機関の責務として、障害者や高齢者も含めた市民全体に文化的なサービスを提供しようというのが、そのねらいである。視覚障害者に、美術作品や舞台作品を鑑賞してもらったり、高齢者を対象としたワークショップなどに取り組む例は、わが国でも見られるようになってきたが、NPOによって運営される米国の劇場などでは、すべての市民は芸術を鑑賞する権利を有している、あるいは、公共劇場はあらゆる市民に芸術を提供する義務がある、という考え方に基づいて、より幅広いサービスが提供されている(図表-1)。

また、芸術をよりよく理解してもらおう、よ

写真-1 温泉町温泉小学校で行われたワークショップ



り深く体験してもらおう、というのも、アウトリーチ活動の目的のひとつである。ギャラリー・トーク(学芸員などによる作品解説)はわが国の美術館でもすっかり定着したが、演劇やダンス公演の終了後に、演出家や俳優、ダンサーなどと対話の機会を設けるポスト・パフォーマンス・トーク、作品解説付きのレクチャー・コンサートなどの試みも徐々に増えている。現代美術や現代音楽などは、ときに難解とされて市民から敬遠される傾向があるが、解説によって作品への理解を深めたり、市民それぞれの鑑賞の楽しみを見いだしてもらい取り組みも、アウトリーチ活動の重要な要素である。

また、アーティストによる演劇や音楽ワークショップなどの市民参加型のプログラムは、公演や展覧会では得られない芸術体験を市民にもたらしもので、近年とりわけ活発になってきたアウトリーチ活動である。

これら多様なアウトリーチ活動を束ねる大きな目的は、文化施設や芸術団体が、地域や市民との結びつきを強化することであり、そのことによって、芸術をとおした新しい社会サービスを模索する動きととらえることも可能である。

そしてこれらアウトリーチ活動の中で、最近とくに注目されているのが、学校とタイアップした事業や子ども向けのプログラムである。

図表 - 1 ガスリー劇場（米国ミネアポリス市）の障害者向けサービス（Access Service）

サービスの名称	サービスの内容
Audio Described Performances イヤフォン・ガイド付き公演	視覚障害を持つ市民でも演劇を楽しめるよう、音声解説者（Audio Descriptor）の舞台解説をイヤフォンで聞けるサービス。1992年に開設。音声解説者は特別な訓練を受けた専門家で、視覚障害者の目となって、俳優の仕草や表情、コスチューム、舞台上の動きなどを、台詞の妨げにならないよう合間合間にライブで解説する。どの作品も公演期間中に最低2回は開催され、イヤフォン・ガイドは一般市民でも利用可能。
Sensory Tour 舞台セットや衣装などを手で触れて確認できるサービス	イヤフォン・ガイド付き公演の参加者を対象に、公演当日の午前中に開催されるもので、舞台セットや衣装に手で触れてもらい、舞台作品の視覚的な情報を可能な限り提供しようというもの。参加者は、ステージに上がって舞台セットの内容や配置を確認したり、舞台衣装や小道具に触れて形やテクスチャーを知るとともに、それがどんな場面で使われるか事前に解説を受けられる。
ASL Interpreted Performances 手話付き公演	聴覚障害者向けの手話付き公演。1976年に開設。ガスリー劇場の手話通訳者（Guthrie Artistic Interpreter）は、芸術的な表現を的確に手話通訳するために特別な訓練を受けている。既存の手話言語では対応しきれない芸術的な表現にも対応するため、公演の数週間前からより適切なASL（American Sign Language）への翻訳準備を進め、実際の公演に合わせて十分なリハーサルをした上で本番に望む。
Access Center アクセス・サービス・コーナー	次のようなサービスやツールを無料で利用できるコーナーが、劇場のメインフロアのロビーに設けられている。 イヤフォン・ガイド・レシーバー 点字もしくは大型活字で印刷されたプログラム 大型活字で印刷されたり、カセットに録音された劇場の催し物案内 老眼鏡、補聴器 ガスリー劇場の点字ガイド など

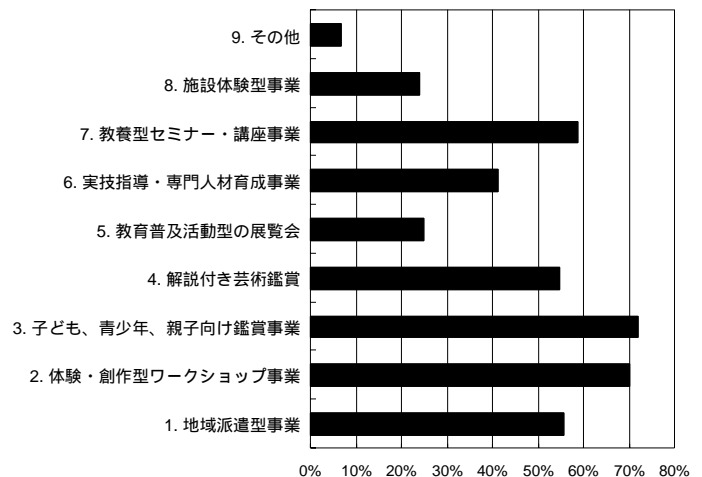
（注）ガスリー劇場では、この他にも、学校向けの鑑賞教室（年間約9万人の児童・生徒が参加）、開演前シンポジウム、劇場のバックステージツアー、作品のスタディガイド、教師向けワークショップ、演劇教室など、幅広いアウトリーチ活動が展開されている。
（資料）ガスリー劇場提供資料より作成

2. 鑑賞教室からアウトリーチ活動へ

昨年、アウトリーチ活動を実施している全国の公立ホールや美術館を対象に実施された調査でも、子どもや青少年、親子向けの事業を実施しているケースが最も多かった（図表 - 2）。学校の体育館で芝居や演奏会を見たり、聴いたりする芸術鑑賞授業は従来から実施され、最近では各地に整備された公共ホールで鑑賞するケースも増えている。

しかし、最近の学校や子ども向けのアウトリーチ活動では、こうした従来型の鑑賞教室とは異なる取り組みが行われている。一言でいえば、完成された作品や公演を鑑賞するのではなく、様々な形で、子どもたちがより身近に芸術を体験したり、アーティストと交流できるようなプ

図表 - 2 公共ホール、美術館におけるアウトリーチ活動の実施状況



（注）アウトリーチ活動を実施する国内の公共ホール、美術館を対象にしたアンケート調査の結果（有効回答数104件、複数回答）
（資料）「アウトリーチ活動のすすめ - 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究」、（財）地域創造、2001年3月

プログラムが工夫されているのである。

例えば厚木市文化会館では、優れた舞台芸術鑑賞の機会を子どもたちに提供するため、85年から「少年少女芸術鑑賞会」が続けられている。これは、教育委員会や子ども会と共同で実施するもので、会館で優れた舞台芸術や音楽を鑑賞してもらう事業である。

この会館では、この事業に加え、99年度から「厚木シアタープロジェクト」というプログラムを開始した。これは地元出身の劇作家で劇団「扉座」を主宰する横内謙介氏と共同で実施するもので、文化会館での扉座の演劇公演、シアタートーク、演劇体験講座、演劇出前ワークショップによって構成されている。中でも、小学校を訪問して行われる「演劇出前ワークショップ」は、非常にユニークなアウトリーチ活動である。

横内氏と劇団員5～6名、音響技術者1名が学校に派遣され、5、6年生を対象に事業が行われる。会場は体育館、人数分のパイプ椅子の他に、二つのスピーカと音響装置が用意される。プログラムは二部構成になっていて、前半は「音を聴いて想像してみよう」というワークショップ。音響技術者が様々な効果音を流し、それを聴いて想像力を働かせるというもの。何十頭もの馬が右から左へ駆け抜けていったり、体育館の上空をジェット機が轟音とともに通過したりする。わずか二つの小さなスピーカと簡単な音響機器で、よくこれだけの大音量と臨場感あふれる音空間が表現できるものだと感心させられる。音響技術者を見る子どもたちの目も、徐々に尊敬のまなざしに変わっていく。最後の効果音は、映画ゴジラからの抜粋。遠くからゴジラの足音が近づき、大音響とともに体育館が踏みつぶされる、という想定である。10人ほどのグループに分かれた子どもたちが、皆の前で

写真 - 2 厚木市伊知南小学校での演劇出前ワークショップ



ゴジラに踏みつぶされる様を思い思いに演じて、前半は終わる。

後半は、「さよなら先生」という短いシナリオに基づいて進行される。子どもたちに人気の先生が、学校の指導方針とぶつかって、学校を去らなければならなくなった、という設定で、子どもたちと先生の別れのシーンが描かれている。10名前後のグループごとに劇団員が一名ずつ付いて、せりふや演技を指導し、皆の前で順に演じていく。短時間の稽古で、迫真の演技をする児童がいたり、中には別れのシーンで涙を流す子どももいるという。

このプログラムでは、子どもたちは想像力をフルに働かせ、短い作品を自ら演じることで、演劇の持つ力や魅力を感じとる。それは、演劇作品を鑑賞するよりも、より深い演劇体験といえる。初年度は、疑心暗鬼だった学校側も、子どもたちの目が輝くのを見た教師たちが、このプログラムに賛同し、今年からは教育委員会の主催で実施されるようになり、教師向けにも同様のワークショップが実施されるようになったという。

3. 学校にアーティストを届ける
- 学習指導要領の改訂と総合的学習の時間 -

厚木市文化会館の例に限らず、「すみだトリフォニーホール」を活動の拠点とする新日本フィルハーモニー交響楽団の取り組み（楽団員が年間約60日、学校訪問を実施）や、冒頭で紹介した（財）地域創造の公共ホール音楽活性化事業などをきっかけに、このような学校とタイアップした活動を展開する文化施設や芸術団体は、確実に広がりを見せている。

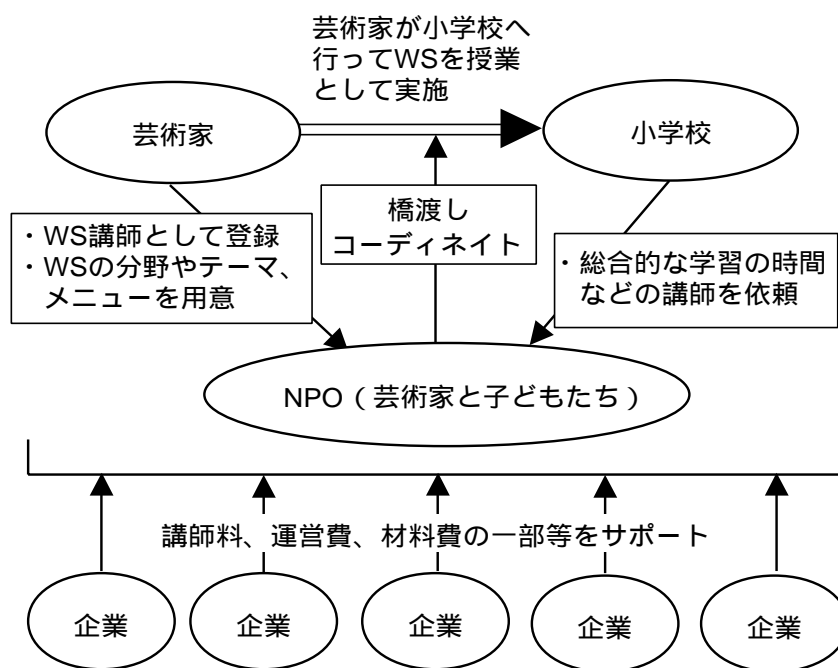
こうした動きにリンクする形で、アーティストが学校を訪れること自体の意味や可能性を見いださう、という動きも広がりつつある。その背景となっているのが、来年度から施行される学習指導要領の改訂である。週休二日制の完全実施のもと、各学校が「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開することが重視されるようになる。小学校では音楽や図工だけではなく、国語や算数などの授業数も削減される一方で、3年生からは年105～110時間の「総合的学習の時

間」が設けられる。

学習指導要領では、総合的学習の時間について「各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする」とされ、昨年度から移行措置として導入が始まっているものの、学校現場では、具体的にどのような授業をすればいいか、とまどいも見られるという。

そうした中、都内では、アーティストが子どもたちを対象におこなうワークショップ形式の授業を取り入れる学校が出てきた。アーティストと学校の出会いをアレンジしているのは、特定非営利活動法人「芸術家と子どもたち」である。このNPOは、総合的な学習の時間の本格導入を視野に入れ、「小学校へプロの芸術家を派遣し、一般的に学校教師が苦手とする、子どもたちとの双方向型、参加体験型の授業を、総合的なテーマへ関連づけやすい芸術（音楽、美術、身体表現、マルチメディアなど）を題材に、

図表 - 3 ASIASの事業構造



(注)WS:ワークショップ
(資料)NPO「学校と子どもたち」作成の企画書より

芸術家が、その技能と、子どもたちの個性や表現力を引き出す力を持って、実践する（同NPOの設立趣意書から）」ことを目標としている。

このNPOの代表を務める堤康彦氏が、芸術振興協会（APA）のもとで99年に「芸術家と小学生プロジェクト（ASIAS、Artist's Studio in a School）」として企画をしたのが始まりで、2000年度には、7名のアーティストが、都内の7つの小学校で25時限の授業を行い、約350名の小学生が受講した。派遣されたアーティストには、野村誠（作曲家）、井出茂太（振付家）、木佐貫邦子（振付家）、宮島達男（現代美術家）など、コンテンポラリーアートの分野でわが国を代表する芸術家の名前が並んでいる。今年度は15校（都内13校、千葉市、京都府宇治市各1校）での開催が計画されており、来年度はさらに参加希望校が増加する予定だという。

アーティストの授業といっても、音楽や美術を教えるというスタイルのものではない。第一線で活躍するアーティストが、芸術的な表現や双方向のコミュニケーションをとおして、子どもたち自身の持つ創造力や想像力を引き出すこと、表現能力やコミュニケーション能力を養うこと、他人の個性や価値観の違いを互いに認め合うことなどに重点が置かれている。

米国でも、90年前後から学校へアーティストを派遣する活動が活発になったと言われている。70年代の財政危機で学校から芸術系の授業が大幅にカットされた結果、逆に芸術教育は子どもたちの健全育成になくてはならないという反省が生まれ、学校に音楽や美術の教師がいなかったことも一因となって、芸術団体や文化施設と学校が協力する形で様々なプログラムが開発、実施されている。演劇や音楽を媒介にして、国語や数学、理科、社会を教えるといった試みも行われている。

また、全米の多くの州では、州政府の文化局がアーティストと学校との出会いをアレンジし、助成金を支給する制度も整えられている。州政府の担当者は、「アーティストを派遣することの最大の意味は、学校の音楽や美術の教師と違って子どもたちに点数（優劣）をつけないこと」だという。

* * *

わが国では、これまで芸術や文化は、関心のある一部の市民のもの、と認識される傾向が強かった。しかし、本稿で紹介したアウトリーチ活動は、芸術が趣味や娯楽の枠を超えて、教育や福祉の分野でも大きな可能性を秘めていることを物語っている。アウトリーチ活動に取り組むことで、アーティストの活動場所は、劇場や美術館から学校や地域の中に広がり、そのことで、芸術活動もより社会的、公共的な意義を持つようになるだろう。

芸術というものは私たち人間の精神に働きかけ、内面から活力を生み出す力を有している。そう考えれば、アウトリーチ活動は、芸術の持つ社会的な役割を、教育や福祉、地域活動の分野まで押し広げ、芸術活動によって我々の内面から地域社会の活力を創出する、そんな可能性を秘めていると思うのだが、いかがだろうか。

(注1) 日本語では、芸術普及活動、教育普及活動（とくに美術館において）と呼ばれることもあるが、必ずしも明確な定義はない。